



「テオ・アンゲロプス全集 DVD-BOX III  
 <時空を超える旅>」KKDS-130  
 「霧の中の風景」「蜂の旅人」「アレクサンダー大王」の  
 3作品を収録。  
 価格：17,640円（税込）  
 販売元：紀伊國屋書店

今回は、テオ・アンゲロプスが一九八八年に撮った名作「霧の中の風景」を紹介する。筆者の独断であるが、テオ・アンゲロプスは、現在存命の中で最も優れた監督であると思う。日本で最初に公開された「旅芸人の記録」から最近の「エレニの旅」に至るまで、好みの点での差はあっても、すべて名作、傑作ぞろいと言って差し支えない。アンゲロプスの作品は、冒頭の作品に加え、「狩人」や「アレクサンダー大王」など、ギリシャの現代史を題材にした作品が多い。しかし、この「霧の中の風景」は、ファンタジックと言うにはリアルな映像が多過ぎるが、寓話的な映画であり、同監督の作品の中でもユニークなものとして位置づけられる。

ストーリーをさらりと紹介するのは難しい。映画は、幼い姉弟が未だ見ぬ父がドイツにいると信じ、ギリシャから鉄道を利用し、ドイツに向かう途中の出来事を描いている。こう書くと「母を訪ねて三千里」的な話と思われるかもしれないが、まったく異なるのである。ギリシャとドイツは国境を接しておらず、この子供たちの父親はドイツに存在しないのであるか



写真協力 紀伊國屋書店

## 鉄道と映画 — 27

幼い姉弟が出発した、旅——  
 痛切なまでに美しい寓話的な映像詩。

LANDSCAPE IN THE MIST

# 「霧の中の風景」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション (FC) への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

ら、父を訪ねる姉弟の行動は、子供たちが理想を追って苦勞する過程を象徴しているものと解釈される。言わば青い鳥を求めた子供たちの旅である。この旅で幼い姉弟は、偽善、死、暴力、愛、破局、希望の喪失などを経験し、やっと国境駅から川を越え、ドイツ側に到着する。ドイツに存在しない父は、当然いないが、そこで姉弟の求めていたものに出会うことができたのである。川を越える際に、国境警備隊の銃声が響くので、この姉弟が死後に求めているものにとどり着いたと考えることもできるが、この映画の寓話的な展開を見ると銃声をリアリステックに捉える必要はないと思う。

アンゲロプスの撮り方は、「狩人」や「ユリシーズの瞳」と同様に現実と非現実が入り混じっている。論理的にストーリーの展開を紹介することは難しく、個々のシーンに全体のストーリー展開の中で意味づけを与えることもやはり感心できない。監督自身が語っているように、個々のシーンは「厳密な意味を込めずにシナリオに組み入れる」(「作品完成時のインタビュー」DVD「霧の中の風景」付属パンフレットより)からである。確かに個々のシーン、例えば馬の死ぬ場面、巨大な彫刻の指が吊り上げられる場面、海を背景にした旅芸人との交流場面などが余りにも意味ありげで、そして美しいので、ついつい勘繰りたくなってしまいが、ここでは子供たちが全力を挙げて求めれば、存在しないものは得られなくとも、そのひた向きな努力は報われるという寓話的映画として見るのが素直であろう。もちろん個々のシーンが素晴らしく、アンゲロプス・マニアならずとも楽しめることは言うまでも無い。

「霧の中の風景」に登場する鉄道は、今まで紹介した映画の鉄道と異なり、寓話上の存在である。しかし、導入部の駅プラットフォームの場面から始まり、待合室、列車内と数多く登場し、いづれも存在感が十分ある。特に駅舎は妙にも悲しく撮られており、この鉄道路線を通らなければ、幼い姉弟は目的地に到達できない、関門の役割を鉄道が果たしているような印象を与えている。現代映画の名作の一つであり、ご覧になることをお勧めする。